

山形県現代俳句協会会報

第29号
令和5年12月

日本人らしい二十日間

山形県現代俳句協会会長 大類つとむ

皆さんも同様かと思いますが、歳と共に一年がぐんぐん短く感じられるようになりました。私たちは確かに時間に沿って行動していることに違いはないのですが、やや長く見てみるとそこに遅速を感じるの、やはり数字だけではない何か大きなものの中に生きているからなのでしょう。

スーパー等には十一月半ばにクリスマスグッズが店頭に並び、ほどなくしてクリスマスソングの中で餅や注連飾りが所狭しと売られ出されます。毎年好感の持てない異様な光景です。

十月、二代目の会長を務められた畠山弘氏がお亡くなりになりました。畠山さんは会の運営や主催事業を大いに尊重しつつも、文芸作家集団としてのその作品の質に重きを置かれました。ごく当り前の事のようにですが、集団を組織した時に忘れられがちな大切なことであると改めて思っています。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

九月十七日、福島で東北大会が行われました。大会に参加してみると、懐かしい方との再会や初めての方との出会いがあり、「俳句」による縁の楽

しさと喜びや、集い合う醍醐味を堪能しました。

しかし、そのような思いとは真逆になります。会員の減少と高齢化により、これまで通りの開催は本県としては不可能であり、来年度の当番県として紙上大会のみの開催を考えている旨、東北地区の役員会において申し述べました。東北地区の一部の県を除き、本県と同様の問題を目の前に抱えているとのご意見が多数あり了承をいただきました。紙上大会とはなりますが、大会の成功に向けて皆様のご協力をお願いいたします。

さて、年末年始は儀式性を好む日本人にとつて最も日本人らしい日々であり、沢山の季語を有する時期です。私事ですが、毎年の年末年始の二十日ほどの間に、二百句から二百五十句つくることを自分に課しています。ひとつの季語で十句つくったり、歳時記に載っている順にすべての季語でつくったりと、自分から自分への宿題です。勿論スケッチ程度のもので殆どですが、自分を苛める良い訓練です。そしてしばらく放っておいて改めての推敲は一カ月半後ぐらいでしようか。身体から句が生まれることを良しとしている私にとって、恒例の自分に鞭打つ二十日間です。

みなさんも、一度お試しください。

畠山弘元会長 代表句（畠山カツ子選）

- 青い麻葉を飲み 銃口を月に向け 『畸形卵』
 尼の 小径の オルガン調の物語 " "
 街を焼き 街を建て 街を焼き 去りぬ " "
 鳥雲に究理の瞳燃ゆるかな 『誘蛾燈』
 濁酒に酔いバイロンに酔いあるく " "
 街角で目を拘られたる十二月 " "
 戒名のわれはいずこぞ天の川 『出羽晚禱』
 母は居ぬかと霞の中の竹を伐る " "
 棲み古りし出羽に鬼火を炎やすかな " "
 柴折戸を押せば素魂の落し文 『出羽逍遙』
 後の世のわれを連れ立つ草市に " "
 初霞して木の家も文芸も " "
 人影は鬼門に鳥影は雲に " "
 鬼を舞う鬼と呼ばれし出羽人も " "
 先の世の汝は鬼ぞと囃す鴟 " "
 雪玉にまじりてとんで人玉も " "
 れんこんのどの穴ゆけば少年期 " "
 山彦がきて揺り落とす栗の実を " "
 初鏡わすれておりし顔ありぬ 『出羽有情』
 よみがたきめくら暦の年明けぬ " "
 よんどころなくまた年を越すことに " "
 流れつつ波間に鬼となる雛も H 30年以前
 わが影を曳く鬼があり二十日月 " "
 どこまでが蛇どこまでが一行詩 " "
 引き鶴に混じりておらん折鶴も R 4年以前
 生国を覗いてあるく夜店の灯 " "
 出陣の学徒のゆくえ返り花 " "

県現代俳句協会吟行会

11・11 鶴岡公園周辺

- 1 全天の黒雲迫るほどに雪 佐竹伸一
- 2 白餅のごとく白鳥蹲る "
- 3 光芒の太く紅葉の城址園 "
- 4 花柎老いてその葉のまろやかに 堀尚子
- 5 雨のごとく櫂の落葉致道館 "
- 6 珍しき犬に曳かるる七五三 "
- 7 山茶花や尖塔赤き天主堂 松浦廣江
- 8 時雨るれば宿を借りたや観音堂 "
- 9 七五三粧いに沿う花手水 "
- 10 曇天や錦木紅葉の美術館 梅木啓子
- 11 このころはあの頃のこと七五三 "
- 12 銀鼠のタクト大屋根秋深し "
- 13 旧藩校受付に積まる花梨の実 井上康子
- 14 落葉風孔子の廟をとり囲む "
- 15 秋惜しむパイプオルガンひそとあり "
- 16 山茶花や黒きマリアと同じアベ 阿部雅子
- 17 致道館の孔子は二重冬日差す "
- 18 くわりんの実徂徠の教え脈々と "

(太字 特選句)

【特選句作品鑑賞】

1 全天の黒雲迫るほどに雪 佐竹伸一

秋の空は変わり易いと言うのは、誰でも知っているが、今年最近まで夏の様な気温が続いていたので雪など降る筈が無いと思っていた。空全体が暗く物凄く速さで雲が降りて来た。迫って来たと言っている、最近の温暖化もあり自然現象は予想出来ない事が多い、予想しても対応が遅くなり最悪の事態になる事もある。雪を恐れていても下五を雪で締めた所に心意気を感じた。

松浦廣江

2 白餅のごとく白鳥蹲る 佐竹伸一

冬の使者白鳥が飛んでいる姿は颯爽として美しいが、地面に降りると全く違う印象になる。特に臀部の重量感、安定感は何とも言えない。「白餅」とは見事に言い得て、ほのかなユーモアが感じられる。

松浦廣江

鶴岡市大山の上池、下池に飛来している白鳥は、朝早く餌を求めて田んぼに移動する。群にはそれぞれお気に入りの田んぼがあるらしい。雪が積もると田んぼで餌をとることができなくなるので、こんな情景は今しか見られないであろう。ローカル色豊かな一句である。

堀尚子

4 花柎老いてその葉のまろやかに 堀尚子

「柎」と言えばギザギザした葉と赤い実、クリスマス飾りのイメージが強い。吟行の時、

現代俳句の秀句を読む 6

まだ見えぬ目で母を見て竜の玉 倉橋羊村

冒頭の掲句は、生後十日で母御と死別された作者の、母恋いの句であろう。長ずるにつけ母への思慕の情が高まって来たのだ。

氏は学生時代に水原秋櫻子の門下生になり、藤沢市で誕生した「波」を、青木康夫主宰亡き後に乞われて継承した。その後各地に支部が出来て、全国展開に貢献した。現代俳句協会の副会長を永らく務められ、温厚な人柄でもって学者肌で、著書「水原秋櫻子」他著書多数。「道元」研究者としても知られている。

山形の指導吟行句会では、靴からセピア色になった花嫁姿のご母堂様の写真を取り出し見せてくださった。いつも持ち歩かれていることに、思わず胸が詰まった

この句を目にし、何で竜の玉なんだろうという疑問が涌いた。

私は幼い頃、門から玄関までの竜のひげの植え込みの中から竜の玉を見つけ出し、ままごとか何か散々遊んだ後散らかしっ放しにしておくものだから、帰宅した父によく叱られたものだ。父は「麦門冬、麦門冬」とよく口にしていたので、きっとこの生薬としての竜の玉に何か思い入れがあったに違いない。

竜の玉は、細い葉の重なるの茂みの中に、冬、瑠璃色の美しい球状の実を結ぶ。そうか、美しい寶石のような竜の玉は、作者には母御の瞳に見えたのだろう。

木嶋 玲子



ほのかな香りの白い花も、老樹の切れ込みを持たぬ丸みのある葉とも対面していないため興味津々の句。長い人生経験は、終と同様、作者の今の生き方そのもので角のとれた穏やかな日々に通じている。

斎藤茂吉の歌にも出会うことができた。

ひひらぎの白き小花の咲くときに

いつしともなき冬は来むかふ

阿部雅子

6 珍しき犬に曳かるる七五三

堀尚子

珍しい犬とはどんな犬か。まずそこで、はたと考える。柴犬やブルドックなどの人口に膾炙した犬でないことはわかる。背中とお腹の部分に毛が無くて胴の長い珍妙な犬をテレビで見ることがあるが、そんな犬だろうか。そして次なる疑問は、そんな犬に曳かれていく家族の構成である。犬も連れての七五三ならば、祖父母も同行していると考えるのが自然。珍しい犬を先頭に、子・両親・祖父母の三世代が畏まって歩く姿は、実に幸せで平穏な姿でもある。読み手の想像力が膨らむように、巧みに構成された秀句と言えよう。

佐竹伸一

14 落葉風孔子の廟をとり囲む

井上康子

落葉風が廟を少し賑やかにしている。静の中に動きがあり、史跡と季語が良く合っている。

梅木啓子

18 くわりんの実徠徠の教へ脈々と 阿部雅子

庄内藩校致道館での一句。開校以来二百年余り経つ今も荻生徠徠の徠徠学の教えを継承して、子どもたちに論語の素読教室を行っているという致道館の取り組みについての作者の思いが表されている。訪れた時、庭の花梨の巨木に大きな実がたくさんついていた。朴訥な感じのする実が、徠徠学と繋がるようだ。初句を「くわりん」と仮名書きにしたのも、その趣が伝わると思う。

井上康子

高点句 (六句)

4 花枝老いてその葉のまるやかに 堀尚子

尚子

高点句 (五句)

2 臼餅のごとく白鳥蹲る

佐竹伸一

14 落葉風孔子の廟をとり囲む

井上康子

吟行会に参加して

今季一番の冷え込みの日の吟行。完全防備で臨んだ。曇天の鶴岡公園周辺の散策。生活圏内ではあるが、俳句仲間と歩くのは新鮮であった。当日は、いつもの散歩コースの逆を歩いたためか、松や紅葉の表情が違って見える。鶴岡にこんな素敵な教会があったのだ。タクトの屋根も荘厳。七五三で人の動きもいつもと違う。

披露時に「吟行ならではの句だね。」とコメントをいただき、ちよつと嬉しい私の吟行デビューとなった。

梅木啓子



↑ 昼食の弁当をおいしくいただき、いよいよ句会が始まった。

←「酒井忠次公ゆかりの地」の幟をバックに。今年鶴岡は入部 400 年と大河ドラマの効果で盛り上がった。(鶴岡アートフォーラムの玄関にて)

島山弘氏を偲ぶ

柏崎青波

平成十一年九月六日付の山形新聞に私の駄句が掲載され、この縁により島山先生主宰の「爐」に入会、終刊・百二十三号（平成二十七年十二月十日発行）まで投句し指導を受けた。二十二年間の文通と、直接お会いしての句会。その明晰緻密な頭脳には敬服するばかりであった。

「爐」終刊後も、先生の体調を気遣い案じつつ指導を受けた。「この句は断定がいいか、限定がいいか」「これはダメ」「これは散文」「俳句はここから」「屈指がほしい」「中七のフレーズは見事」などなど直球であった。手直しはなかった。私にとって先生は育ての親である。今でも耳朶に「寿宣さん、寿宣さん」と呼ぶ声が聞こえるような気がする。

そもそも、仏界とは自分の限界を突破したところに現れてくる命である。人は、自己の命を惜しむゆえに、情性による現状維持に安んじ、なかなか仏界の命は湧現されない。しかし先生は九界の域を突破した姿そのものであった。

絶筆ともいえる手紙には、「いつものように朱筆を入れました。目が段々薄くなり自分の書いた字がまったく読めなくなり、ために柏崎さんにわかるか心配です。病院に行くのもおつくうで、ただ考えていることを万年筆で書き取る、すなわち短詩型にかかわりつづけて来た、功德を感じることしきりです。虫の音が家の周囲ではしきりでいやされます。」とあった。

奇しくも新庄市内

の中学校長の依頼で七月二十日に生徒七十名に俳句の講義をし、先生の教えを伝えられたことが一つの恩返しとも思える。

新聞で先生の訃報

を知り車で駆けつけ、十月三十一日午前十時にお目にかかることができた。穏やかな寝姿に新たな悲しみがこみあげ、惜しみきれない寂寥の念を禁じ得なかつた。奥様の嘆きはいかばかりかと痛恨の極みです。

先生、長い間本当にご苦勞様でした。どうかゆつくり休んで疲れを癒してください。ありがとうございます。

令和五年十二月二日 先生五・七日忌の砌 みぎり

弘氏に白衣掛けやる十一月

柏崎青波 合掌



事務局より

八月二十日、山形県現代俳句協会の役員会を山形市において開催し、来年度の東北大会について協議しました。慎重審議の結果、会員と役員の高齢化が進み、スタッフの確保も困難であることから、紙上大会に限定しての開催とする旨を決議しました。これを受けて、会長が九月十七日の東北地区役員会において、本県の意向を伝え、了承をいただいたところです。紙上大会とはいえ、多くの準備と協力が必要です。詳細が決まり次第お知らせいたしますので、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

編集後記

今年は熊の出没情報が多かった。人間も熊も生き抜く為に食と居場所は大事である。人間が自然と共存しながら生きていくために更なる知恵が求められている。

松浦廣江

新入会員紹介

うにがわ えりも 氏（山形市在住）

第13回鬼貫青春俳句大賞。第8回北斗賞佳作。短歌も詠む、期待の新鋭会員です。

会報29号 令和五年十二月発行

発行人 大類つとむ

発行所 山形県現代俳句協会

〒九九七-四二二七

尾花沢市中町五-二〇

〒九九〇-一五五二

朝日町常盤に五二-一

事務局 佐竹伸一